視　点

『学問のすゝめ』のすすめ

最近ふとしたきっかけで、福澤諭吉の『学問のすゝめ』を二十数年ぶりに読み返す機会を得た。恥ずかしながら、改めて読んで、福澤が伝えたかった本当の意味に気づかされた。とはいえ、あくまでも筆者の勝手な解釈であることを予めお断りしておく。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」ではじまるあまりにも有名な一節があるが、ここで福澤は、「貴賤・貧富の差は生まれながらにして決められたものではない」「学ぶか学ばないかで違いが生じる（のだから、西洋の文明や豊かな生活にキャッチアップするためには、きちんと学問を修めなさい）」ということを説いたものと思い込んでいた。が、その先をすっかり忘れていたのである。後半の第十五編では、「信の世界に偽詐（ぎさ）多く、疑いの世界に真理多し。」としながらも、「事物の軽々信ずべからざることはたして是（ぜ）ならば、またこれを軽々疑うべからず。この信疑の際につき必ず取捨の明（めい）なかるべからず。けだし学問の要はこの明智を明らかにするにあるものならん。」とも述べている。つまり、世間一般に言われている通説を疑うこともせずに、わかった気になっていることこそ恥じるべきことであり、信じるべきか疑うべきか、物事の取捨選択の判断力を養うことが学問であるというのだ。

少し話しはそれるが、世の中では、いわゆるバブル入社世代の上司は「依存心が強く、他人の責任にする」とか、「自分に甘く、部下の粗探しばかりする」などといわれて若い部下に疎まれているようである。かくいう筆者も同じ世代であるが、職業人生の折り返しを過ぎたころから、同世代の仲間たちと「最近の若者は…」という話しになることが急に増えた。つい先頃も、ある中小企業の経営者から最近の若い従業員の特性について、興味深い話を聞いた。彼らは、非常にまじめで企業に対しても忠誠心が強いが、その一方で、与えられた仕事の本質を考え、工夫しながら行動することが苦手で、（失敗することを極度に嫌うために）すぐに正解を知りたがるという。さらに、彼らは仕事の中でわからないことがあっても、先輩や上司に教えを請うことが苦手で、パソコンやタブレット端末で検索すれば用が足りると思いこんでいる向きがあるようだ。これを最近の言葉では「グーグル・ナレッジ」と呼ぶらしい。世代によって、すべての物事を分類してしまうのは間違いなのかもしれないが、筆者はその話しに不思議と違和感を覚えなかった。自分の後輩にも、思い当たる若者がたくさんいたからだ。

『学問のすゝめ』に話しを戻そう。上の話しをとりあげたのは、福澤の論がまさにこの話しの真理を突いているのではないかと思ったからだ。例えば、バブル入社世代に対する部下の若者からの批判に対応するための指南は、次のようである。第十四編の「世話の字の義」にあるように、世話には「保護」と「命令（指図）」の二つの意味があり、その両方を備えていなければ、施した世話はその人のためにならない。したがって、私たちバブル入社世代は、部下や後輩に対して「傍（かたわ）らより番をして防ぎ護り、あるいはこれに財物を与え、あるいはこれがために時を費やし、その人をして利益をも面目をも失わしめざるように」保護しながら、「人のために考えて、その人の身に便利ならんと思うことを指図し、不便利ならんと思うことには意見を加え、心の丈（たけ）を尽くして忠告することにて」命令しなければ、若者の信頼を得ることができないのだ。また、最近の若者の方は、冒頭引用したように、溢れる情報の中から信ずるものと疑うものを判断する力、自ら考える力を養うことが必要なのである。

すべてを紹介しきれないのが残念だが、百五十年近くも昔に書かれた本書を現代の私たちが読んでも、明治という新しい時代を築こうと意気揚々としていた日本人が発する言葉の輝きは、まったく失われていない。いま私たちは、失われた２０年を経て、閉塞感に満ちた時代からの脱却を試みている。この時代に働くすべての人に、改めてこの書を手にとることをお奨めしたい。

（連合総研主任研究員　小熊　栄）